

〔研究ノート〕

『ビッグ・イシュー』をめぐる私の教育実践

池 野 重 男

1. は じ め に

私は、これまでに本誌で、「『ビッグ・イシュー』を購入する学生たちと私の講義——『ビッグ・イシュー』と学生たち（Ⅰ）——」（第56巻第4号 05年11月）と、「『ビッグ・イシュー』日本代表佐野章二氏講演を聞いた学生たち——『ビッグ・イシュー』と学生たち（Ⅱ）——」（本号）を発表した。できるだけ多くの学生たちのレポートをそれらに収録すべく努めてきたが、すべてを掲載できなかった。

そこで、ここでいくつかの論点にまとめる形で学生たちのレポートを補足し、同時に、私のやり方に反発する学生たちのレポートを示しつつ、あらためて私の教育実践を確認したい。

2. ホームレスのイメージについて

前まではホームレスと聞いて連想することは、決して良いものではなかった。なぜそんなに汚い格好をしているのか。なぜ家がなく路上や公園で暮らしているのか。なぜ働かないのか。漠然とホームレスに対してマイナスなイメージを抱いていた。最初、ホームレスについて「偏見」を持っていた。街中で彼らを見ると、目を逸らしていた。しかし、これは勝手なイメージであって、本質を知らなかったからである。ものごとをいろんな角度から見ると、本質が見えてくる。 (三回生)

ホームレスの人達は、昼間から公園で寝ていたり、駅の隅や目立つ所に横になっていたり、ゴミ箱をあさっていたり、リヤカーを引っ張っていたり、この人達は何をしているんだろうと思っていたんですが、今日の佐野さんの話を聞いて、ホームレスの人達は昼に寝て夜に空き缶などを集めているから生活のスタイルが逆転して、昼に休んでいるのが分かった。

前にテレビでホームレスの特集番組をしていて、近ごろのホームレスの人は貧乏な人ばかりではなく、バブルで借金まみれになった社長の方たちが自己破産してホームレスになるケースや、若者で家を飛び出してホームレスになる人があり、インタビューで話を聞くと、昔社長だったので経営のノウハウはあるが住所がないので仕事も見つかりにくく、苦勞しているというテレビを見て興味を持ちました。

これからも梅田など行ったら、ビッグイシューを買って、ちょっとでも販売員の方たちの生活に役立てばいいなと思いました。(三回生)

ホームレスの人は昼間眠っているだけだと思っていたけど、夜に空き缶を集めたりダンボールを集めてとても安い値段で売っていることを知って、とても重労働なのに少しのお金しかでないことにビックリした。(三回生)

ホームレスとはどうしようもない人間というイメージを自分の中で決めつけていた。しかし、今回のビッグイシューの人の話を聞き、自分の中で抱いていたイメージというのが崩れ、と同時にホームレスとは駄目な人間って決めつけてた自分が情なく思った。中には厳しい状況でもビッグイシューの人達のように何か自分の中に目標を持ってがんばっている人達もいるんだと、イメージだけで勝手に物事を決めつけるのは本当に良くないことだと、ビッグイシューの人の話を聞いて、そお思いました。(四回生)

今回の佐野さんの話を聞いて、前回のレポートで書いたホームレスのイメージが変わった。まず、働こうと思って職種を選ばずに働くとしても、その稼いだお金では部屋を借りることは困難だと気づきました。その月の生活費でいっぱい입니다。私が今の自分の状況を考えたとき、親や奨学金の援助を受けずに、バイト代だけですべてを負担するとしたら、まずムリです。部屋を借りるには敷金があるので、月額料は払えるとしても、そこでつまずきます。そうすると、ホームレスということになります。実際のホームレスの人達には、本当にその日暮らしの人と、ちゃんと頑張っている人がいて、ホームレスの人達用の格安の宿もあるそうで、びっくりしました。でも、私には最終的に頼れる人がいますが、ホームレスの人達にはいろいろな事情により、頼れる人がいません。そのためにホームレスになってしまうんだと分かり、今までの「働く気がない、生きる気力をなくしてしまった人達」というだけのイメージは変わりました。

ビッグイシューについてですが、初め、ビッグイシューを売っているのはホームレスの人達で、そのホームレスの人達のために作られたのがビッグイシューと知ったとき、なぜか私は悪印象を持ちました。しかし、今は頑張って自立しようとしているホームレスの人達を支援するために作られたんだと思うようになりました。このように頑張っているホームレスの人達には、これからも少しずつ頑張って、ホームレスを次々と脱出してほしいと思います。(三回生)

今回の佐野さんの話を聞いていて、ホームレスと若者の共通点ということで、何か共通する部分があるなと思ったし、3Kのイメージはなくなりました。(三回生)

私の中のホームレスの方々のイメージが変わったのは間違いありません。彼らにもそれぞれの仕事を持ち、それぞれの生活がある。当たり前なことだけど、改めて考えるこ

ともありませんでした。また、「ビッグイシュー」を売るホームレスと、そのターゲットである若者に共通するものがある。それは、共に仕事がないこと。確かに！ と納得させられました。私はまだ「ビッグイシュー」を読んだことがありません（ごめんなさい）。でも、これから「ビッグイシュー」を売っているホームレスの人を見たら買わずにはいられない気がします！！

佐野さんのお仕事はとても大変だと思うけど、とても素敵なお仕事だと思います。とても勉強になりました。（一回生）

私は以前、梅田で買い物をしていて適当にブラブラしていると、偶然ビッグイシューを売っている人を発見した。以前、池野〔助〕教授の授業でビッグイシューについていろいろ教わったので興味もあったし、1冊買ってみることにした。「ビッグイシュー、1冊、ください」と声をかけると、若干愛想悪い感じで「はい」と言われ、私は一瞬声をかけるべきではなかったなあと後悔してしまった。失礼な話、私の中でホームレスとは怖い人達というイメージがあり、「はい」という愛想悪い第一声により、そのイメージが強くなった。お金を渡してさっさと帰ろうと思い、お金を渡して本を受け取った時、「本当にありがとう。またよろしくお願いします」と販売員の人が笑顔で言ってくれた。一瞬、あれっと思った。自分の中では怖いだけのイメージしかなかったのに、あんなに優しい笑顔をしてくれるなんて。

そして2週間後、池野〔助〕教授の授業でゲストとしてビッグイシューの代表の人が話をしてくれた。話を聞くと、販売員は死活問題の中で本を売っており、1冊でも買ってもらえたら、それが生活費に大きな影響を与えるから、本を買ってくれた人ひとりひとりに本当に感謝しているんです、とおっしゃってた。ああ、だから、あんなにも優しい笑顔をしてくれたんだ。

今回の経験でホームレスの人に対してのイメージが少し変わった。（四回生）

佐野章二さんのお話を聞いてから、ホームレスの人に対する見方が少なからず変化しました。ホームレスの人は公園や駅でダンボールの上なんかで寝ていて小汚いイメージしかなく、できるだけ近づかないようにしていました。しかし、ビッグイシューを販売しているホームレスの方はそんなイメージは微塵もなく、気さくな方々でした。また、ホームレスの人は、仕事もせず、その日暮らして何とか生活しているだけで、社会復帰など全く考えていないものだと思っていたのに、社会復帰の第一歩である家を持つと貯金をしようと日夜励んでいる人もいるとゆうことに、正直驚きました。自分からなりたくてホームレスになった人はいないはずだから、よく考えれば当たり前ののでしょうが、ホームレスの人がこんなに頑張っている事実を分かっている人は、ほんの一握りだけなのが悲しい現実です。イギリスではホームレスを社会問題として政府をあげて問題解決に成功したと聞いて、日本でもホームレスの人が社会復帰できるような政策を国レベルで考えてみてほしいと思いました。（四回生）

佐野さんのお話を聞いて、私は、今までホームレスの人達を少し差別していたように思いました。3Kのイメージが強かったです。佐野さんが頑張ってビッグイシューを作られたお話を聞いて真剣にホームレスの人のことを考えているんだなあと思ったし、それだけでなく、日本の社会全体を見ているんだなと思いました。私もこれから社会に出る一人として何か出来ないかと真剣に考えさせられました。

釜ヶ崎のことを母に聞いたら、社会のひずみだと言っていました。肺結核の人が多くとも言っていました。母は若いとき同和地区について勉強し、その時に釜ヶ崎も学んだらしいです。進歩するということはどこかでひずみがあると言っていました。日雇い労働者の人がいっぱいいるらしいです。京都には子どもがいるホームレスの人が多くそうで、とても深刻なのに若い人は何も知らないのが現状だと言っていました。日本は北朝鮮問題やイラクの問題に必死になる前に、日本のホームレスの人や釜ヶ崎の問題を先に取り組んでほしいです。
(四回生)

今までのホームレスに対する考え方も変わった。今、ホームレスと若者は、就職難という同じ問題を抱えていることも分かった。今まで自分とホームレスの人とをまったく別のものとしか見ていなかった。でも、今回、佐野さんの話を聞いて、ホームレスの人とあまり話したことはないが、なぜか同じ問題を抱えているというだけで、少し親近感が持てた。

この前、友人にビッグイシューのことを聞いたら、やはりまだホームレスの人に対して偏見を持っていた。世の人すべてにホームレスの問題を分かってもらうことは難しいが、佐野さんにもっと色んなところで今回話してくれたような講演をしてもらいたい。自分も、友人や家族にこのホームレスたちの現状を話していきたいと思っています。

(三回生)

私の持っていた偏見、なぜホームレスは昼間から寝てばかりなんだ、働けや！ と思っていた。しかし、佐野さんのお話の中で、夜中に空き缶を集めているので昼間は寝ているということを聞き、今まで自分の持っていた気持ちが一気に裏返させられました。ホームレスの人達、すげえ！ と心の中で思いました。これからも、佐野さん、がんばってほしいです。そして、これからの社会を支える私達自身、ホームレス問題など様々な問題をこれから抱え、解いていかなければなりません。佐野さんに負けない立派な人間になりたいです。本日は本当にありがとうございました。
(四回生)

これまで無知な自分は、路上生活者というのは社会の波からこぼれ落ちてしまった生産能力の乏しく意欲の無い人たちだと思い込んでいた節があるし、税金も払わなくてよく、意外といい暮らしをしているという印象すら持っていた。同じような状況の人間でも路上生活に傾く人とどうにかアルバイトでもして頑張る人というわけであり、日本の風土や現在の社会情勢がホームレスを助長していると言っても、その分岐点はどういっ

たものなのであろうかが、疑問に思う。

私はこれまでに一度だけビッグイシューを買ったことがある。これまでも梅田に出る度に販売員の人が必死に売っている姿を見ていた。当時通りすがりに見ていて、正直「ホームレスの人がこうやって売って本当に買う人がいるのか」と思ったのを覚えている。話にでも出てきた“三重苦”を専門家が指摘したように、客観的に（ホームレスに対しての認識が薄い人が）見ただけではビッグイシューのような制度は難しいように思う。しかし、実際には平均一日一人が30冊を売るということを聞いて、非常に驚いた。買っている人が支援的な意味合いで買っているのか。異質な売り方であるから、買うのか。本の内容が優れていると知っていて、買うのか。どういう理由かは、人それぞれあると思うが、本文の質がある程度以上を保っているからであるのは確かであろう。私も一度買ったことがあるが、思った以上にしっかりとした内容に満足した。買う時も、気持のいい売り手の受け答えに、これまでのホームレスへのイメージが覆された。

話の中でも出てきたが、現在の社会はマニュアル化されており、無気質な感謝の言葉が氾濫している。それも過剰敬語であるため、言われても反対に相手から感謝の気持ちを受け取ることは無い。しかし、私が買った時の販売員の人の、「ありがとう」には、今日一日の生活がかかった本当の気持ちが籠もっていたと感じた。私にできることが何かというのは今の段階では分からないが、少なくとも販売員に気がついた時にはこれからも買ってゆこうと思う。

（三回生）

「ビッグイシュー」を買うまでの自分のホームレスにもっていたイメージは、汚くて暗くて無気力が毎日を生活していると思っていた。買い始めてからは、自分よりも気力や意志をもって生きている人もいるんだと今では思っています。

佐野さんの話にあった、ホームレスの自立へのステップが、自分のような若者にもよく当てはまると思った。将来のための貯金をせず、ひとり暮らしや家事手伝いをしないから、ちゃんと親から自立できるか不安なんです。専門家からは100%失敗すると言われる、赤字も1000万円を超えても続けていて、警察とも妥協できるまで交渉し続けた熱意が羨ましかったです。

（三回生）

現在、日本にいるホームレスの数は二万五千人～三万人といわれています。私の故郷の人口が五万人程度なので、日本中のホームレスを集めると、ある程度の大きな町ができるほどの数がいるということです。お茶碗のような物を持って俯いて座っているだけのホームレスを、大阪に来てよく見ます。働く気もなくただ周りから何かを恵んでもらうのを待っているだけの人達だけを見ると、ホームレスの人たちのイメージはとてつもなく悪いものになっていました。でも、ビッグイシューを買うようになって、販売員の人たちと少し話してみると、イメージが少しずつ変わってきました。ビッグイシューの内容も面白いし、これからも買い続けようと思っています。

（三回生）

まずホームレスについて見る目が変わりました。僕の中では、ホームレスというものは仕事があるにも関わらず仕事をしていない人々だと思っていました。しかし、実際はそうではなくて、仕事をしたくても出来ない人々がたくさんいるということを知りました。しかも、それが自分達の住んでいる大阪府が一番多いということを聞いて、とてもショックでした。

そして、佐野さんがおっしゃっていたのが、ホームレスを見ても見て見ぬ振りをするのは作法であり、いけないことでないということです。僕は実際見て見ぬ振りをしていてのか分からないので、とてもいいアドバイスをしてくれたと思いました。今度から気をつけたいです。これからは僕も雑誌を買ったり、できることはしたいと思うので、これからも頑張っしてほしいと思います。(三回生)

佐野さんの話を聞くことによって、ホームレスの人に対する不信感などが、少しなくなりました。今までの先入観はなくなった、と言ってもいいと思います。しかし、全体のホームレスの印象がよくなったわけではないのですが。一生懸命働いて稼ごうとしている人も、仕事を探してる人もたくさんいると思いますが、それでもまだ逃げているだけのような人のほうが多い気がします。確かに、ホームレスの人を雇ってくれるような会社や請負の会社はなかなかないと思います。しかし、ビッグイシューのように、ちゃんと助けてくれるものもあるのに、なぜやらないのだろうと思います。

今回の話を聞いて、自分の考えていなかったことは、最低だと思われました。それは、汚いとか臭いとか、人間として見ていなかった自分がいるからです。しかし、それが自分の恥ずべき考えだとは少しも思っていませんでした。

考えてみれば、ホームレスの人たちは逃げただけかもしれませんが、それでもその原因を作ったのは今の社会にあると思います。そういう意味では、この人たちが一番の被害者なのだと思います。そんな人たちを見下していたので、今回話を聞いたことに感謝しています。(四回生)

3.『ビッグ・イシュー』とホームレスについて

僕の暮らしている街は西成区で、愛隣地区も近くです。だからホームレスの現状を嫌でも把握することができます。別の言い方をすれば、とても近い存在です。そんな西成区に住んでいる僕だから、ビッグイシューの人達にはがんばって欲しいです。まだ解決していない問題は山積みですが、僕もできるだけビッグイシューを購入して応援していきたいです。(二回生)

ビッグイシューのことは、昔テレビでやっていたのを見て知っていたが、ただ雑誌を売っているんだなあと思っていた。佐野さんの話を聞いた時に、ホームレスの自立を応援するために始めたと聞いて驚いた。ホームレスと言え、空き缶を拾って売って金を稼いで暮らしていたり、働かない人たちのことと思っていた。それに、そういう人たち

を見ると、見て見ぬ振りをしていたのに、佐野さんはそこに目をつけ、ビッグイシューを発行し始めたのは、鋭いと思った。マスコミが書かない問題を書き、行政や企業との協力関係を築き上げて、いいと思う。しかし、1億700万円のホームレスの利益に対して1000万円の累積赤字では駄目だと思う。ホームレスや社会のためにビッグイシューを発行したのだから、元がつぶれてしまっただけでは意味がないので、表紙を人気ある人にして女性の購買者を増やしたり、何か手を打って利益を出してつぶれないことを願う。

(四回生)

父によく言われていたことがあります。「ホームレスはなまくらや」、「奴ら働く気力もない」。それを聞いて、それが真実だと思いながら育ちました。実際本当に無気力になり、そういう道に向かっている方もおられると思います。しかし、佐野さんの話では、すべてがそういう方ではないという真実を知ることができました。

働きたいのに働けない。これはホームレスのほとんどが再就職もできない、四、五十代の方が多いということから理解できました。アルバイトでも何でもすればいいと簡単に思っていたんですが、住所もない、着ていく服もないとなれば、差別の目は容赦なく注がれてしまうでしょう。その前の段階を頑張らなければならない。この事実が私に最も衝撃を与えました。

缶を拾い集めて踏み潰しての分別、電車等に放置された雑誌を収集したり、ビッグイシューの販売……こういった仕事で少しずつ貯めたお金で賃貸のアパートを借りる。ここからが社会復帰の第一歩。そこから住所が発生し、仕事探しが本格的にスタート。佐野さんの言っていたホームレスが踏む三段階のステップは、我々が当然のこのように持っているもので、失うことはまずないだろうと感じているものでした。基礎を固めるだけでも相当の労力を要し、そこまでたどり着ける人が少ないというのも分かる気はします。アパートを借りたとして、仕事が見つからなければ家賃を払えなくなってしまう。そして、追い出されて、また、元の生活に逆戻りしてしまう……。先の見えないホームレスの方にとっては、希望を見いだそうにもかなり難しいのではないのでしょうか。もし私自身がこうなってしまったらと考えると、今の今までぬるま湯の生活に浸かっていたがために、恐らく元の生活まで上り詰めるには相当時間がかかると思います。

私の父のように、我が身に降りかからねばその人たちの現状を知ろうともせず自分の勝手な出鱈目のイメージで相手を判断してしまうことは、あってはならないと感じました。希望を見いだそうと必死になっている方もいる。幸せになろうと努力している人がいる。何もない位置から何かを得ようとしている。非常に勇気のいる、素晴らしいことだと思います……。しかし、明日は我が身と考えるとやはり身震いがするくらいです。そうならぬよう、今ある自分のこの現状を当然のものとして捉えるのではなく、様々な人たちの支えがあってのものだと深く感謝し、今の自分の幸せを少しでも分けてあげられる、手助けをすることのできるようにしていきたいです。同じ「人」として、私達にできることはほんの小さなことでも、いくらでもあるはずなのですから。(四回生)

私は、ホームレスの人がビッグイシューを売っていることについて知った時、稼ぎが少ないのになぜやっているのだろう、なぜアルバイトをしないのだろうと思っていたのですが、住所がないとアルバイトが出来ないということを初めて知りました。

ホームレスの人は働きたくないからという理由でホームレスになっているという人がほとんど全員だと思っていたのですが、離婚したりリストラになったりしてホームレスになるんだと知り、ショックを受けました。また、平均年齢が56歳で、私の父親と同じくらいであるという事実を知りました。ビッグイシューの目的は、ホームレスの人の自立を応援するためである。今販売している人は、続ければ貯金が貯まってドヤに泊まる、アパートを借りて住所を持つ、そして働くという3つのステップをクリアすることが出来るので、私はまだビッグイシューを買っていないので、ホームレスの人の自立に少しでも役に立てるように買いたいと思います。(三回生)

話を聞いて思ったことは、たとえ本を売ったとしてもその月の生活ができるとか、最高でもアパートを借りれる程度にしかねないということです。自分はその程度なら夢がないと感じます。もっと政府・自治体が協力すれば底上げができるでしょう。無駄な公共工事とかを省けばいいのです。(四回生)

最も印象に残ったのは、ホームレスの人々が再び立ち上がるのはとても難しい、ということだった。ホームレスになるのはとても簡単だということも、確かに、と思った。言ってみれば、今この時をもって自分がホームレスになることだってありうるということなのだ。ただ、そこから立ち上がっていくには多くのステップを踏まなければいけない。今までビッグイシューを売ることが最初のステップだと思っていたが、そうではないのだ。ビッグイシューをたくさん売するためには大勢の人の前に立たなければいけない。ホームレスの人にとっては、そのこと自体が嫌な人もいるのではないだろうか？ 大勢の人の中には偏見の目で見える人も少なくないだろう。ひどい人ではその偏見を態度に表わす人もいるのではないだろうか？ それに耐えなければいけないし、季節によっては立っただけで辛い日もあるだろう。最も大きな敵は、それに自分の心が打ち勝てるかどうかだろう。また、ビッグイシューが売れるかどうかという問題もある。僕も二回買いに行ったが、そのとき他の人が買っているところを見たことはなかったし、僕らが買うとすごく喜んでくれた。しかし、その喜びを裏返せば、それだけ売れていないということではないだろうか。

また、佐野さんが言っていたが、久しぶりにまとまった金が入ったということで、思わず使ってしまう人もいるということだ。ここでも自分の心と闘わなければいけない。そして、お金を貯めて住所を持ったとしても、そこに居続けるためには、次は職に就かなければいけない。そこでもまた偏見の目と闘わなければいけないだろう。さらに、仕事を続けていけるかという問題もある。

実際にホームレスになっていなくても、佐野さんの話を聞いて真剣に考えると、これ

だけの問題が見つかる。もし本当にホームレスになったとしたら、想像を絶する辛さがあるだろう。そこから立ち上がった人はとても強い心を持っていたのだろう。

また、ホームレスの人達にこれらの道を示した佐野さんも、赤字だと言っていた。それでも自分の利益よりホームレスの人達の道筋を示すほうを選んだということは、口では言うのは簡単だが、大きな決断だったろう。

今の状況から抜け出そうと頑張っているホームレスの人達も、それを支えている人達も必死で闘っているということがひしひしと伝わってきた。(三回生)

大阪でビッグイシューを売っている人は100人近くいて、その中の20人がドヤを1カ月3万円で契約しているそうですが、残りの80人は集団や路上で生活していると聞き、あまりビッグイシューが売れていないのかと思います。だから、ホームレスが売っている本だから近づきにくいと思わずに、どんどん沢山の人が買ってほしいと思います。

最後に。佐野さん、カッコよかったです。(四回生)

4. 『ビッグ・イシュー』に学ぶ

前回、「ビッグイシュー日本」代表の佐野さんの講演会を聞き、一番印象に残ったのは、街に溢れているマニュアルの接客に慣れてしまった人々の耳にビッグイシュー販売員の心からのお礼の言葉が大きなインパクトを与えたというものであった。ただ単にビッグイシューを売り買いし、お金を得るだけでなく、人々に勇気を与えたというのは素晴らしいことだと思う。

僕も、アルバイトでマニュアル化された接客をしている。だが、客の立場から考えると、マニュアル化された接客に何かを感じることは少ないように思う。マニュアル化が良いとか悪いとかの単純な話ではなくて、たとえアルバイトでもこの話から学べることは多いと思う。

なかなか梅田や心斎橋に出る機会がなかったのでまだビッグイシューを購入できていないけれど、見つけた時には購入して会話をしてみようと思う。(三回生)

佐野さんの話を聞いて、ビッグイシューの読者を若者を対象としたのはとても良いと思った。ビッグイシューは読んでみるとなかなか面白い本だし、ホームレスを偏見の目で見る人は大人より少ないと思うからだ。私は、本を初めて買いに行った時は「怖そう」というイメージを持っていたが、いざ買ってみると怖いどころか逆に賑やかな人で、イメージしていたのと全く違っていた。きっと、他の読者も初めはホームレスから本を買うことをためらっただろうが、二度目からはけっこうよい印象を持って買っていたと思う。

ホームレスの人がビッグイシューを売ることによって屋根のある家に住むようになるのが目標と言っていたので、本を毎日売るぐらいで家に住めるかと思ったが、話を聞いていると、努力次第でそれも可能だということが分かった。ホームレスの人たちはビッグイシ

ューを一生懸命売って、家に住んで、ふつうの暮らしをしてほしい。私たち若者はビッグイシューを購入して、隅から隅まで読んで、知識を増やしていこう。そうすれば、日本は良い国になっていくなあと思いながら、佐野さんの話を聞いていた。（三回生）

5. 私の教育実践に反発する学生たち

当たり前のことだが、私（の教育実践）に反発する学生たちもいる。たとえば、次のようなレポートがある――

ホームレスに対して自分は否定的だ。人生の落伍者と思っている。昼は異臭を撒き散らしながら道で寝て、夜はスーパー等の裏の生ゴミ置場を漁って散らかしたり（片付けるホームレスも中にはいたが……）、働かんくせに万引きしたり……。そのくせに一人前に「この社会は間違ってる……」とか、ぬかしやがる。それも、金を恵んでくださいっていう箱と一緒に貼ってあるから、説得力もクソもない。正論吐いたところで負け犬には変わらん。正義が勝つんじゃなくて、勝ったもんが正義ってのは、昔から変わらんねんから、いいかげん、悟れよ。

働こうという気がないホームレス（佐野さんの話では、80%は何かをしているらしいが……）に比べて、ビッグイシューの販売員はホームレスでも好感が持てる。まあ、見た目も汚くない、臭くないというのもあるが、昼間のホームレスのような腐ったオーラ（オレには見える）が出ていない。働こうという気が見える人は好感が持てる。ホームレスじゃなくても仕事をしている人で「どうサボるか？」とか考えてるヤツはシバキ倒したくなる。しっかりした目標っていうのかな？ なんつーうか普通のホームレスはその日を生きてたらいって感じがする。ビッグイシューの販売員は、佐野さんが言うてたように目標がある。路上暮らし脱出、住所を持つ、新しい職に就いて生活するっていう目標が。

ホームレス全国3万人、うち大阪7千人って、どうよ？ 7千人のうち60人だけがビッグイシューの販売員って、どうよ？ 1%にも満たない数字じゃあなあ。ビッグイシューっていうきっかけだけでも相当な労力やったみたいやけど、ホームレスが大阪に固まってる限り、ホームレスを無くすなんて無理やし。ビジネスやったら将来のことも考えなアカンし、赤字を出すのなんか以っての外やろ。ビッグイシューTシャツなんか作る必要ないやん。販売員が着てんの、見たことないし。

若い女性に売れてる理由は、女は「私はホームレスに対してなんて良いことをしたのでしょう」とか、そういう感じやと思う。自分のステイタスを上げたいって言うか、周りに良く見せたいって言うか。←女に見せたら殺されそうやな……。 （一回生）

これに対しては、少なくとも二点コメントしておかなければならない。第一は、世の中を、「正論吐いたところで負け犬には変わらん。正義が勝つんじゃなくて、勝ったもんが正義ってのは、昔から変わらんねん」と自分の《賢さ》をひけらかして諦観していること

である。もっとも、ここにある「賢さ」もじつは独善的なものでしかない。たとえば、「生ゴミ置場を漁って散らかす」ホームレスがいると言いながら「片付けるホームレスの中にはいたが……」と限定し——いろいろな人がいるのだからこの限定は当然のことなのだ！——、もうひとつの「働かんくせに万引きする」ホームレスに対してはなんら限定はしていない。どうして「万引きしないホームレスの中にはいたが……」と書かなかったのだろうか？ ホームレスへの一方的な非難を正当化したいがためであろう。私が、このレポートを独善的というひとつの理由である。

そして第二に、さらには、何かをやる人に対して「1%にも満たない数字」ではやっても意味がないと決めつけたり、「自分のステイタスを上げたいって言うか、周りに良く見せたいって言う」自己満足でしかないと切り捨てることで、じつは何もしない自分を正当化し安心するという、典型的なパターンである。

典型的であるからこそ、この態度はどこにでも見られる。たとえばアメリカの場合——「政治家や大企業には勝てっこない。／どれだけ社会が変わるように願っても、一人ができることなんかたかが知れている。／みんなそう思ってあきらめちゃう」、そして、「人は理解できないものに出会ったときに、自分の中の恐怖にふたをするためにラベルをつける。／ふたをするはずが逆に恐怖を増大させ、憎悪となって差別を生み出し、やがてそれによって正当化された、人間が犯しうる最大のあやまち——戦争——が、取り返しのつかないやり方で貴いものを破壊してゆく」（堤未果『報道が教えてくれないアメリカ弱者革命』海鳴社 06年 p. 13, p. 55）。それゆえに、と私たちにも課題を提起する——「私は世界中に無数に散らばり、そしてまた私自身の中にもあるだろう、いまいましいラベルについて考えた」（同 p. 55）。私も、「私自身の中にもあるだろう、いまいましいラベル」を摘出するような講義を行ないたい。

これは、白波瀬佐和子「格差論が見過ごしていること」（『世界』06年6月号）が今日の格差論議を「おとぎばなしの格差論」でしかないとの確に言い、「他人事」ではなく「時代を作っていく当事者であることを自覚して議論することが必要である」と提起するところにつながる——「かつては、不平等、差別、階級などという言葉が発しただけで左派のレッテルが貼られ、一般の市民が口に出すのはばかられるといった雰囲気さえあった。しかしいま、『金持ち－貧乏人』『上流－下流社会』『勝ち組－負け組』といった言葉を日常語で何のためらいもなく発し……そこには、結局のところ他人事の面白おかしいお話にすぎないという人々の認知構造がある。他人事だから、『自分』がいない『お話』だから、口に出すのはばかられるようなことも平気でいえる。……無責任なレッテル貼りをする者も、そのレッテルを貼られた者も他人事としてとらえることで、どちらの側にも『自己』のいない『おとぎばなしの格差論』が展開される。ここでのポイントは、両者の側に『自己』が存在せず、『行為に対する責任』が介在しないところにある。……格差や不平等の議論を川の向こう岸のお話として終わらせるのではなく、われわれ一人一人が時代を生き、時代を作っていく当事者であることを自覚して議論することが必要である」。私もまた、そんな学問・教育を実践したいのだ。

さて、先の学生ほど頑なに現実に居直って自己正当化していないけれどそれでもいささか理屈が先行している、次のようなレポートもある（しかし、それでも最後のほうで私の講義の狙いを確実に捉えてくれている）――

[略] そして最後に、なぜ私が今まで梅田を毎日通っておきながらビッグ・イシューを買わなかったのか、について。[略] ホームレスが一生生活出来ることを前提としていないボランティア、たとえば、一回ボランティアをしてみないかと誘われたからとか、そういった理由での支援はしないほうがよいと考えるからです。もちろん、その支援をしてもらえるホームレスは一時的に助かるかもしれませんが。しかし、それが短期的なものであれば、その後そのホームレスはどうしたらよいのでしょうか。一時的に支給されたものに頼ってそれに慣れてしまった時、そのホームレスは支給されるのが当たり前になり、支給がなくなれば捨てられた気になり、もっとつらい思いをするかもしれません。もし一生支給する気がないのであれば、初めからしないほうがいいのではと考えるからです。[略]

授業でビッグ・イシューの紹介をされた時、その紹介の仕方は、「ホームレスの自立を考える本があり、その名前はビッグ・イシューだ」と先生はおっしゃっていました。ホームレスの支援を目的としてビッグ・イシューを紹介されたから、私は買わなかったのです。もちろん、毎日頑張っている姿を見ていましたので、買っていいかなとは思いました。でも、その理由なら買わないほうがよいかも、と思ったのです。先生の論文¹⁾を読みましたが、学生全員がそろって、相手がホームレスだから買うといった感じでした。私はそうではなく、ビッグ・イシューの内容が面白そうだから買ってみたい、だけど、売っているのがホームレスだ、という順番であるべきだと考えるのです。そうになって、ビッグ・イシューを買うことこそ、初めて本当にホームレスの為になると思ったのです。

しかし、今回はビッグ・イシューを買ってレポートを書くということでしたので、横断歩道にいる方から買うことにしました。そして、中を見ましたが、思った以上に面白い内容でした。そして、バックナンバーを見ると、2歳になる姪が大好きなアンパンマンの表紙のものが、見てみたいと思いました。そして、こういった機会をこの講義では与えることが目的だったのかなと思いました。（二回生）

6. 私の教育実践の確認

私は、いつものように「『ビッグ・イシュー』を購入する学生たちと私の講義」（前掲）を友人・知人にも送ったが、「学外ゼミ生」を自称して丁寧な感想を返してくれているAさんから、「素朴な感想をお伝えしたい、おしゃべりしたいという思いにかられてペンを

1) 私の「『ビッグ・イシュー』を購入する学生たちと私の講義——『ビッグ・イシュー』と学生たち（I）——」（前掲）のこと。

とりました」という手紙をもらった。私の教育実践を——ひょっとして私以上に！——的確に捉えてもらっているの、ここにその一部を示して、本稿のまとめとしたい。

[略]

・声をかけるということ

池野さんが『ビッグ・イシュー』を購入するに際して学生さんたちに売っている人に対して「話しかけること」と指導なさったこと——これに関してわたしにはすぐ浮かんでくる痛切な思い出があるんです。

戦後まもないころ、巷には傷痍軍人が溢れていました（若い方はご存じないと思います）。カンパ箱の前に白衣で立っている元軍人の、ある人は片腕がなく、ある人は片脚がなく松葉杖をつき、ある人はアコーディオンを鳴らしたりしていました。遠くから見かけた時はわざわざ立ち寄ったことはないのですが、ちょうどその人たちの目の前を幼い子どもの手を引いてのお使いの帰り道、その一団と出くわしました。子どもには目をそむけさけたい痛々しい光景です。わたしは財布の中から十円（いまの100～200円ぐらいに値します）を取り出しカンパ箱に投げ入れました。その時——

チャリン！

投げ入れた銅貨が箱の中に鳴ったとき、ゾッとしました。「ゾッとする」も適切な表現ではないのですが、一瞬なんともいえない痛いまでの恥ずかしさに、子どもの手を引いて逃げるようにその場を離れました。眼に涙がにじんできて、わたしは大声をあげて泣き出したいような気持ちになって帰ってきました。

このことをありのまま素朴な文章で、わたしたちが出していた「なえどこ」（送料十円のワラ半紙にガリ刷りの粗末なミニコミ誌です）に書きました。後日、この文について仲間（このころサークルと言っていました）が取り上げて話し合いになりました。

「ボクは十円も入れたことないよ」

「これ見よがしに傷痍部分をむき出しにされるのは——」

「正直言って不快だ。政府が保障すべきだ」

こうした意見が活発に飛び交いました。終わりごろ一人が、「Aさんの言っていることはそんなことではないだろう。Aさんはそんなこと百も承知なんだから」と言ってくれました。

わたしの問いたかったことは、「関係」ということです。恥ずかしさに眼に涙が浮かんだことをその後反省し痛切に考えたことは、あの時なぜ声をかけなかったのか、ということです。「ご苦労さまでした」「どこで負傷なさったのですか」「お痛みになりませんか」——「カンパ、少しで、ごめんなさい」でもいいのです。そこに「人」と死んだ「お金」との関係でなく、人と人との関係が成立します。

わたしは、池野さんが『ビッグ・イシュー』を売っている人、ホームレスに声をかけるようにと勧められたことに熱い感動を覚えました。

生きた人間と生きた暮らしの中でお金に関係としても見えてくるんですね、100円の

価値が。最低限の価値。食うためのパンや野菜を交換する「交換」の代価。モノを生産し、モノを必要とする暮らしの中のお金との関係。仕事がないということ。モノを生産する労働のよろこびをゼロに貶められた“人”。屋根のある暮らしから締め出された原因——

「売れてますか?」「ありがとう」……^{ママ}声をかけることによって、ささやかな人間関係が復活し、はじめて生きたお金が視えてくるようです。

池野さんはいい先生ですね！ 能力主義社会を肯定している学生さんたちや、機会がなかったら『ビッグ・イシュー』を買わなかったとか言っている学生さんたちに自由な討論をさせると面白いでしょうね。池野さんは一言もはさまずに。きっと、「きみは能力主義のエリートになれるのか」とか反論が出そう。

こんな厳しい競争社会に、ろくに仕事にもありつけない（現代ほど労働者をバカにしている時代はない！）、誰かの支えがなければホームレスすれすれの不安定な将来しか約束されていない、学生さんたちの悲鳴が、わたしには聞こえてきます。

池野さんは、学生さんたちをたくさん甘えさせて（ホント素直な発言。なめられるぐらいの勇気がなければ愛も教育も生まれない）あげてくださいね。彼らの悲鳴が、ほんとはわたしたちみんな共通の悲鳴です。

これを解くカギは、わたしにはわかりませんが、池野さんはしっかりと握りしめてこれをこじ開ける力と勇気を与えてくださると信じています。たくさん、たくさんの「ありがとう」を申し上げます。

本稿は、〇六年度特別研究費〔テーマ：「自己責任」時代の助け合いの模索〕の成果の一部である。